
一人のサムライ@関西

尺取虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人のサムライ@関西

【Nコード】

N7173Y

【作者名】

尺取虫

【あらすじ】

「一人の侍」という小説を、表現は異なりますが、「菜根譚実践同好会」という自分のブログで掲載しています。

「7人の侍」のパロディになっている箇所が数箇所ありますが、内容等は非常に大きく異なり、類似性も無いと考えます。

あらすじ。

農民達は、前例に倣い侍を雇おうとする。しかし、村には米はなく、

粟と稗だけだった。そんな状態では侍は雇えない。
ただ一人、呼びかけに応じた侍がいた。

一人の侍と雑多な仲間達の運命の齒車が今動き出す。

関西風、時代劇っぽい、連載小説。一人の侍@関西

第1章 稲穂村より（前書き）

この小説にでてくる、所在地、言語、人物は全て架空のもので、モデルにした物、人もいません。

第1章 稲穂村より

それは、一人のサムライが生きた人生の奇跡。

本当にあったお話じゃないヨ ★ テヘ！♪

侍が闊歩しているほど昔のことじゃった。

古河茅の国 稲穂村は、野伏による略奪に悩まされとった。
そこで悲壮な顔をした村民達が集まって、対処を話し合っていたっ
ちゅうわけや。

。村の長老「大おじじ」と「金一じい」を中心に車座に座ってお
った。

この村を率いているのは、「蛇田 壮平」通称「そうべい」、「岡
澤 直良」通称「なおよし」

築地 幾宏 通称「つつき」である。

そうべい…「凶作なのに、ご領主様への年貢でとれるだけとられち
まった。。

それなのに、今度はまた野伏や。。もう、首くくるし
かねえ。」

なおよし…「どうせ死ぬなら、なんで野伏をやってしまったわねえんや。
さあ、戦だ！

とつとと戦うべ！」

：

つつきー…「…それは無理な話や。。勝てるわけへんではおまへんか。」

なおよし…「なんだと！お前から先にやってやろうか！つつきー！

お前の家族全員、野伏に連れ去られたやないか。
それでも、そないなことを言うのか！」

「よし！おらは戦うぞ」「やめろ！勝てるわけがない」

村民皆、ざわつく。

大おじじ…「ちーとばかりして！静まれ。静まれ。わしがまだ小さい頃の話やった。

ある村で、侍を7人雇って野伏を退治したちう話を聞いたことがある。

そう、侍を雇うのや！」

そうべい…「Σ（・ω・ノ）ノ！さ、さむらいを雇う。大おじじ、でもどうやって。。」

金一じい…「その村では、米を腹いっぱい食わせてやると釣ったそうや。

前例から考えて、我が村でも7人くらい雇えばなんとやろかるかの？」

つつきー…「それは、米があればの話やろうて。野伏と年貢で我が村には米はほとんど無い。」

なおよし…「やってみなきやわからんやろ！わてはやるぞ！侍雇って戦やるぞ！」

大おじじ…「そうやな。手をこまねいては状況は悪化するだけや。」

米はだせんが、稗くらいならある。

そうべい、なおよし、つつきー、町へ行って侍を雇って来い！！」

大きな町の中、途方にくれる三人組。人の多さに飲まれてしまっている。。

なおよし…「さあ、声かけまくろうぜ。なにグズグズしとるんだ！」
つつきー…「そないなことしたら、「無礼者！」と切り捨てられて終わりや。」

そうべい…「そういうわけや。簡単にはいかん。
それに人物も確かめへんと、後で困ることになる。」

なおよし…「ちえ。そないなことわかってるぜ。で、侍のあてとかありまへんのか？」

そうべい…「残念ながら、まるつきしないのや。」

これから、知り合いの住職に話を聞いて、ほんで賭場と宿屋に行く。」

つつき…「そないなことで、働いてくれる奇特な奴が見つかるのかいな。こないな損な話。」

つつきーの言葉のせいで、一同落ち込みながら移動を開始した。

お寺の住職に会いに行く途中、そう、その人物に遭遇してしまうことになったのだ。

ならず者…「おい、お前。金だせよ。ないなら、その刀でも置いていけ！でなきゃぶっ殺すぞ！」

堅そうな侍…「はい。要求はわかりたんや。あんはん様のなされとる行為は、強盗でっしゃるか？」

ならず者…「抜けたこといってると、ただやすまないぞ！早く金を出せ。」

堅そうな侍…「あんはん様の行為により、

ていらしゃった上で

いますけれど、

ウチが反撃する危険性は当然考慮し

なされとるんやね。確認させてもら

ちゃんと、命賭けていらっしゃるの

やね？」

ならず者…「こいつは、気が狂っとるのか？わては金をだせっていつとるんじゃない！」

何でもええから早く!!」

堅そうな侍…「わかりましたんや。あんはん様がそのつもりなら、それに見合った対処をせななりまへん。」

ウチも命を惜しみまへん。それが、道理やろからな。

」

カシャリ、刀を抜く。

ならず者は刀を奪おうとするが、一步遅く届かない。

ならず者…「しもた。やばい奴に声かけてしもうた。逃げるぞ！」

ならず者は、脱兎のように逃げていった。

そう、それがそうべい、なおよし、つつきーが森島様を最初にみた事件やった。

なおよし…「あいつ、強いのやろか？ならずものが逃げていったぞ。声かけようぜ。」

つつきー…「大丈夫か？髭はやして、なんかやばそうな風貌やけど。

急に斬られたりせんのか？」

そうべい…「いや、頑固そうで、堅そうな顔してるやないか。

ああいう手合いは、理屈で攻めれば説得できるよ。まかしとけ。」

そうべい…「あの、お侍様。」

今、稲穂村の稗を宣伝しておりますて、
稗の餅を配っとりますんや。」

堅そうな侍…「そうか、そうか。それはありがたい。腹が減つottaのや。」

むしゃむしゃ。

そうべい…「お侍様。お代は？」

堅そうな侍…「貴様。金をとるのか。聞いてないぞ。…それでなんぼやろか。」

そうべい…「我が村を野伏から守って欲しいのや。もちろん、

食事はウチで持ちまんねんし、稗と粟を
腹いっぱいだしまんねん。」

堅そうな侍…「わしゃ。食べとらん。」

そうべい…（；´Д´）ノ「お召し上がりになられたやないか！」

堅そうな侍…「食べてへんもん。」

なおよし…「そないな詐欺みたいな方法で、怒らせたらどうするんや。この馬鹿！」

そうべいは引っ込んでろ！」

なおよし…「お侍様。強い敵を倒し、一つの村を助けてくれまへんかね。

わしらの身なりの通り、なにもかも野伏にとられたんや。

どうか、一緒に戦ったただけまへんか？

皆、明日が見えなくて毎日毎晩壱年中泣いとるんや。」

堅そうな侍…「強い敵、嫌や。」

なおよし…「そこをなんとか。人助けだと思って協力しとっただけまへんか？」

堅そうな侍…「社会の構造的欠陥と村周辺の警備体制の不備が根底にある。

野伏退治しても、野伏はいなくならへん。やから、なにもならへん。」

つつきー…「やめようわ。こないな人を雇っても役に立たないやろうわ。逆に迷惑になる。」

森島様…「なんだと。」

つつきー…「だってそうやないか。この腰抜け侍め。お前なんかに何がわかる。

耐えてる人間の何がわかる。

貴様みたいな腰抜けがきても、野伏に殺されるだけや。

」

堅そうな侍…（TωT）

堅そうな侍…「／＼。□。／　引き受けた。その仕事引き受けた！この森島倫正に

でけへんことなどなあんもない！」

そうべい、なおよし、つつき…「えゝ。ほんまに困るわ。」Y（
>|<、）Y

そうべい…「それで、森島様。どうしまっか。これからお寺の住職に会いに行こうと思うのやけど。」

森島様…「それでよかろう。」

道を歩いとると尺八を吹いとる虚無僧がいた。

森島様…「お寺に行かへんでも僧侶なら、あそこにいるではおまへんか。」

そうべい…「虚無僧か。虚無僧は、僧侶になる前はは武士と聞きまんねん。

なんか、つてがあるかもしれまへん。」

森島様…「それや、わてが話しつけてくる。」

森島様…「稲穂村で、稗と粟をどれだけもお布施したいとの申し出があるのやが、

貴殿さえよろしければ、受け取りに来てはくれへんか。できれば、数ヶ

月村に滞在しとっただきたい。」

虚無僧…「そうか。それはありがたい。」

森島様…「信者からのお布施やから、断ったりせんよね。絶対だよ。○（〃＾▽＾〃）○」

森島様…「おい。みんな。虚無僧雇ったけれど、ええよね。」

そうべい、なおよし、つきー…「…。」

虚無僧…「わしは、道覚と申す。」

こうして、道覚様が仲間に加わった。

なおよし…「お侍様。お寺の住職を勧誘したりしたら駄目や。

ウチらは、侍を雇いたいんや。無駄に雇えん。」

森島様… ビクッ

つきー…「とはいっても、長老の話だと、あと5人は雇わなきゃな。侍を。」

そうべい…「前例主義者の長老のことや。道覚様雇ったことだけでもうるさいぞ。」

一同…ため息

そうべい…「着いたぞ。この寺や。」

森島様…「極楽大空寺か。百姓の間では絶大な人気らしいな。
（。▽、。ノ）」

つつきー…「何ぞ悪い予感がする。まあええ。中に入ろうわ。」

道覚様…「ウチも入ってよろしいのやろか？」

お寺の中、森島、農民3人、道覚様、住職が座っている。

住職…「事情はわかった。野伏に困つとると。それで、どうすればええ。」

そうべい…「まず、ご領主様にごこのことをお伝え願いたい。」

ほんで、侍を紹介していただきたい。」

住職…「ワイが思うには、ご領主様はなあんもなさりまへんやろうわ。稲穂村は、国境に近く、

下手に対処すればお隣の積藁の国を刺激してしまうわ。侍なら紹介できるが。…」

そうべい…「そうやろな。じゃ、その侍に会ってみまんねん。それだけでも、十分ありがたい。」

住職は手紙と地図を描いてそうべいに渡す。

そうべい…「この近所やね。すぐに行ってみまんねん。」

「ほんで、森島様と道覚様はここで待ってておくんなはれ。」

森島様…「なんでやねんや。仲間はずれや。酷いではおまへんか。

わしがいくと、上手くいかへんと思つとるのやろ。」

つつき…「いや、お侍様のお手を煩わせるわけにはいきまへんの
で。」

森島様…「そうかう」

そうべい、なおよし、つつき、が出かけ、寺には住職、森島様、
道覚様だけが座っている。

住職…「その虚無僧は…？」

森島様…「ウチが雇うことに決めたんや。」

住職…「思惑でもあるのか？それとも虚無僧から侍に還俗すると？」

森島様…「いや、僧侶であることに意義があるのや。」

僧侶が村にいれば、野伏達も村に攻撃しにくくなるでっ

しゃろ。

名のある高僧ちうことにしておけば、効果があるのではと。」

住職…「そうやな。でも虚無僧殿だけでは、ちびつと抑止力としては弱いのおわ。」

どや、うちの弟子を一人送ろうか。我が寺の僧侶を傷つけるようなことは、

野伏もせんやろうわ。信者が多いこの土地で、そないなことをしては生きていけんからな。」

森島様 …「それはありがたい。では、念仏が上手い僧侶を一人雇わせていただきたい。」

住職…「うむ。それなら、恵向がいる。念仏の歌唱力だけは若手で一番や。住職命令で派遣しようわ。」

こうして、恵向が、一行に加わった。

そのころ、住職に紹介してもらった場所で、そうべい、なおよし、つつきーは紹介された侍を探していた。

そうべい…「確かにここのはずなんやけど。侍が住んでいるようなところやないな。」

つつきー…「どう見ても農家ではおまへんか。居候しとるちうこと

か？」

なおよし…「とりあえずこの家の人に、尋ねてみようわ。」

ガラガラ。

そうべい…「すいまへん。ここに峯澤政之助様ちう、お侍様がいらつしゃると聞いたんやが、」

老婆…「峯澤様なら、裏の畑や」

そうべい…「それはありがたい。すぐに行ってみまんねん。」

「よかった。どうやらここにいらつしゃるようや。」

3人組。裏庭へ移動。

峯澤様… ジャキーン。 ジャキーン。

つつきー…「あれはなんや。畑を耕しとるのか？」

なおよし…「馬鹿なことをいうでは無い。」

あれは下段からのすねへの打ち込みを稽古してええるのや。」

「練習中に申し訳ない。極楽大空寺の住職の紹介で、参上つかまつった。なおよしと申すものや。」

峯澤様…「なにか事情がありげだな。畑で一汗かいて腹減ったところだし、

一緒に夕飯でも食べながら話しようか。」

そうべい…「この人ええひとや。やつとまともな人に会えた（≧≦▽
≦≦）」

峯澤様…「刀で畑仕事はつかれるのうわ。

ははっ、 剣の稽古をしながら、野菜も手に入る。一
石二鳥や。」

なおよし「…」

峯澤政之助宅にて、質素な夕飯を囲みながら、

峯澤様…「話はよくわかった。やけど、その話には残念やけど、
乗れん。」

つつき…「なんでやねん。わしらを助けるじょうもないっちゅう
ことか。」

峯澤様…「いや、そうではおまへんが、ウチには隣の家の老婆がお
ってな。世話をせんといかんのや。」

「やけど、そう落ち込むではおまへん。

もつともつともつともつともつともつともつともつとも
つと、

腕の立つものを紹介しようわ。

あいつなら、必ず、助けになってくれるやろうて。義侠
心のあるやつやからな。」

そうべい…「ありがとうごぜいまんねん。

夕飯までごちそうしとっただいて、この恩は一生忘

れまへん。」

峯澤様…「いや、力になれなくてすまなかった。

紹介した奴は、毎日毎晩壹年中この近くの船の渡し場におるから

いまからでも行くといええ。日が沈むと家に帰ってしまうからな。ほれ、紹介状や。」

なおよし…「ありがとうございますまんねんわ。」

3人の農民が岸边に佇む。

そうべい…「言われた通り、渡し場に来てみたが侍はいるのかの？」

井之川様…「おい、その3人。この川を渡るのか、わたりまへんのかどっちゃ。」

そうべい…「いや、峯澤様ちう方に紹介された人を待っとるんや。

剣の腕がどエライ人がいるってきいてきてみたんやけど。」

井之川様…「おう。それはわてのことだぜ。わては剣の腕で負けたことが無いからな。」

つつき…「いやいや。刀持ってへんし、船頭やから侍では無いでしよ。」

船頭..「信じてへんようだな。やあ、わての櫂さばきをみせてやるよ。」

鼻頭に一粒の飯粒をつけられ、硬直しているなおよし。(4 1
11)

なおよし..「な、なんでおらがこないな目に。」

船頭..「黙っとけ。ちびつとでも動いたら。死ぬぞ。オラッ、いくぞ！」

船頭は櫂を大きく振りかぶって、なおよしに向かった櫂を振りぬいた。(ノ◇≡。)

ほんで!!!! 米粒だけが、なおよしの鼻の頭から離れ、飛んでいった。

そうべい..「お見事。なおよし、そう泣くな。」

つつき..「かつて、櫂で戦った剣豪がいると聞いたことがあるが..」

船頭..「ははっ。参ったか!! わしは、この渡し場の鬼番長こと井之川俊彰じゃ。」

峯澤様の頼みとあらば、断れねえ。それで何の頼みや。」

寺に帰ったそうべい、なおよし、つつきーと井之川様。

森島様…「待ちくたびれた。そのお方が、今度の仲間か。」

井之川様…「おうわ。おれは井之川俊彰。シブロクコンキューな。」

森島様…「上手くいったみたいだな。わても上手くいった。」

つつきー…「：わても？」

森島様…「一人増えたから紹介する。恵向殿や。」

恵向様…「住職様からのご指名があり、稲穂村にちーとの間修行にいくことになったんや。恵向や。」

森島様…「そういうわけやから。」

つつきー…「やっぱりか…」

宿屋にて。そうべい、なおよし、つつきーと森島様、道覚様、恵向様、井之川様が広間でくつろいでいる。

森島様…「これで、4人集まったわけや。ほなら、あと3人だな。」

井之川様…「せやけどダンさん、戦がわかる人間は、少ないぞ。これで戦えるのか？」

森島様.. 「それがしの手にかかれば、問題無い。」

「その自信はどこぞら？」

森島様.. 「数十回、小競り合いから大きな戦まで、参加してきたが、ウチが死んだことはいっぺんも無いからな。エッヘン。」

一壁 — Д. Y Y Y Y Y A. ! ! ! !

恵向様.. 「なむあみだぶ、なむあみだぶ」

森島様.. 「あけてよく。お外は嫌だよく。」

そうべい…「森島様がいると話がややこしくなる。ちーとの間、追出しとこうわ。」

道覚様…「それなりに考えはあるらしいのや。ウチや恵向様を雇ったのは、

野伏への心理的な備えとしてらしい。

いかんせん、話が噛み合いまへんのが残念や。」

井之川様.. 「おい！そこの念仏僧！うるさいから念仏をやめてくれ。」

「それで、どうする。まともな侍は雇えるのか？」

井之川様..「まあ、見てな。わてに任しとけ。まあ、明日のお楽しみや。(▽+*)」

強い奴を見つけてやるよ。」

なおよし..「油代ももったおらへん。もう寝て明日に備えようわ。」

~~~~~消灯~~~~~

一方、その頃、森島倫正は宿屋の中をうろついていた。

森島様..「部屋を追い出されちゃったし、どうしょ。」 うろうろ。

宿屋の手代..「お侍様。どうやらかされたんやか?」

森島様..＼（。□。）／「その手に持つとるものはなんだ!!!!!」

宿屋の手代..「ほ、箒でございまんねんわ。急にどないされました?」

森島様..「いやちゃうわ。それは刀だ!!その手に持つとるものはなんだ!!!!!」

「!

宿屋の手代..「いや、まぎれもなく、箒でございまんねん。（（（（。；。♫。）（。）（。）（。）」

森島様..「いやちゃうな。確認のため箒ごとたたきるぞ!もういっぺん訊くが、その手に持つとるものはなんだ!

「!!!!!!」

まさちゃん..「これは、刀、でございまつ。 Y ( > | < )  
Y」

森島様..「やったら、君は侍だよね。( ≡ ^ ∇ ^ ≡ )」

まさちゃん..「...はい」

森島様..「今、侍を雇いたいちう人がいるんや。

ちーとばかりこの宿屋の主人のトコに案内してくれんか。

」

朝日が差し込む部屋。

恵向様..「南無阿弥陀仏 なむあみだ。なむあみだ。」

そうべい..「ううわ。朝から念仏はやめてくれ、隣の部屋から怒られる。」

なおよし..「ホンマに、うるさいな。部屋の中なら小声で唱えればええのに!」

道覚様..「いや、あれこそ本物の念仏僧や。」

宿屋の手代..「でもどエライやねーこないなにうるさいのに井之川



はんはよく眠っ

てまんねんね。」

そうべい…「そうやね。気持ちよさそうにつて、お前は何者だ!!」

宿屋の手代…「この手代を務めております明津真之と申します。」

森島様…「うむ。通称 まさちゃん だ。」

つつきー…「そないなに勝手に人を雇っては困るんや。」

森島様…「これで、5人になりよったもん。7人まであと2人だもん。」

「まさちゃん!! 君は侍だよね?」

まさちゃん…「( > | < ) ううわ。 侍や。」

なおよし…「森島様に何をされたんや。宿屋の主人は許したのか?」

森島様…「ちゃんと許可取ってある。

この軟弱者を鍛えて返すといったら、許可してくれた。

( - ^ ▽ ^ - ) 」

なおよし…「まさちゃんはそれで、ええのか? 人生狂わせれてるぞ!」



ガラガラ

森島様…「森島がわざわざ攻めて来よったよ。将棋しよ!!」

図師様…「久しぶりやないか。我が将棋の友よ。さあ、早速将棋しようか。」

つっきー…「板の上の戦術家。(T|T)」

図師様…「うむ。要するに、村の用心棒をしろと。そういうことやな。」

森島様…「引き受けてくれるやろか。我がほうにはええ戦術家が必要なや。」

図師様…「馬鹿なことを言うでない。ウチは絵師だし、軍学のことも知らん。」

森島様…「では、将棋の勝負で決めようではおまへんか。」

図師様…「では、ウチが勝ったら、お主が愛用しとる将棋の駒を1つ貰うぞ。」

言っておくが、ウチは3連勝中だぞ。」

森島様…「将棋の駒一つか。よし、その勝負乗った!!」

図師様…「フフッ。」

(これで、貧乏なあやつはウチの家でしか将棋ができなく

なる。将棋仲間GETだぜ」

カチリちう音が部屋に響く、春だちうのに部屋に熱気が籠り暑い。

凶師様..「アナグマ戦法できたか。ならば端を攻めるまでよ。」

カチリ

森島様..「堅い守りを崩せるやろか。守りだけの森島様と呼ばれた我が守りを見よ!」

カチリ

恵向様..「（それは、攻めを知りまへんと馬鹿にされとるのでは?）」

凶師様..「守りきれるやろか。そないなに囲っては、玉の逃げ道も無いぞ。王手!!」

ピシャン

森島様..「むむ、、、必殺!ちゃぶ台返し!!」

凶師様..「そうはさせるか!!!往生際が悪いぞ!」

もみくちやになる2人。それを止める井之川となおよし。

森島様..「凶師よ! 戦場をなんでやねん嫌がる。部屋の中で想像

上の動物を描いて、

それで何が得られた！？どなたはんの役にたった？

言ってみろ！図師様。戦場に来い。その目で戦場を視るんだ！お前も来い。」

図師様…「それと、この勝負なんの関係があるんだ！負けをみとめろ！」

森島様…「お前は、この勝負に稲穂村の仕事と将棋の駒を賭けた。

勝負に「賭け」を入れた時点で、この勝負は、盤上に閉じた勝負では無くなりよったんや。

それとも、そないなこともわからんと、駒を進めとったのか！」

図師様…「そないなこと知りまへんよ！」

森島様…「そないなんやから、絵に魂がこもりまへんんや。筆を取るとき、どないな気持ちやった？

拙者は、この勝負をしとったとき、村の存亡を思って、打とったんや。貴様は何だ！」

井之川様となおしが、2人を引き剥がし、席に戻す。

つつきー…「まあまあ、落ち着いて。

とりあえず、ケツまで打って、勝負を決めてからでもよいのでは？」

森島様…「…わかった。」

図師様…「…最初からそのつもりや。」

森島様が、自陣奥深くで眠っとる桂馬を手に取り、指した！

カチリ

森島様.. 「王手。」

図師様.. 「おい、今のはダメやろ！！桂馬はそないなに跳ねないやろ！！」

森島様.. 「そう怒るな。桂馬の上の乗っとるものをよく見ろ。」

図師様.. 「これは何や？どんぐりか？何ぞ顔が書いてある。」

森島様.. 「頭や。ゴチャゴチャゆうとる場合やあれへん，  
要は、この桂馬は、南蛮の伝説にあるケンタウロスなの  
や。」

。。\*・（。。）（☆○＝）、◇、＊）○

道覚様.. 「今の一手はやり直して依存はないな。」

図師様.. 「もちろん。本来なら反則負けやけどな。」

森島様.. 「ごめんなさい。」

図師様.. 「今度やったら、反則負けだぞ。（ギロリ）」

森島様…「（どうしたものか。ここで負けるのは悔しいし、凶師の奴は強い。」

もう、ここは特攻しやろかいではおまへんか。命を惜しむな名を惜しめ！

角よ突撃せよ。飛車も突っ込め！進め玉。お前が一番強いのだ！」

カチリ

凶師様…「（手が無くなって勝負を諦めたか。もしくは、玉の逃げ道をつくるちうことか？」

カチリ

森島様…「銀よ。桂馬、香車どもを蹴散らせ！」

カチリ

凶師様…「自爆だな。こっちは駒得や。」

カチリ

森島様…「想定済みや。今こそ角よ。突撃せよ。」

カチリ

凶師様…「ありがとはん。（オモロイし、全滅させよ）」

カチリ

カチリ

カチリ

数分後、森島様の持ち駒は玉だけになった。

図師様.. 「諦めよ。もう、負けたも同然や。フフヤツヒヤツ。」

森島様.. 「玉。頑張れ。せめてその死を飾るがええ。突き進め！」

カチリ

図師は、有り余る持ち駒の歩を手を取った。

図師様.. 「王手かつ詰めだ！終わりだ！」

ピシャン

森島様.. 「負けはお前や。打ち歩詰めちう規則を知っておるか？

持ち駒の歩から直接、王手で玉を討ち取ることはできん

のや。」

図師様.. 「しもた。や、やりなおしを。」

森島様.. 「二度目は無いとのことやったからな。負けは負けや。

稲穂村に来てくれるか。」

図師様.. 「くそうわ。約束は約束や。いつ出立だ？」

森島様.. 「今すぐに決まっておるわ。」



新たに仲間に加わった図師様を連れて、宿屋に帰った一行。まだ、日は高い。

森島様…「これで6人揃ったな。あと一人はどうするか。」

つつきー…「流石に、今度こそ、侍を雇うや。」

変なのを雇うことになるのはもうこりごりや。」

井之川様…「おう、わてに任せとけ。とびきり強いのを雇うからよう。」

なおよし…「頼みまんねん。このまんまでは、長老達に怒られてしまうわ。」

戸のそばで、櫓を上段に構える井之川様、一壁一戸。ま  
さちゃんが大通りで、

目ぼしい侍に声をかけとる。

森島様と農民達、僧侶達はゆったり、玄関に座っている。

まさちゃん…「…そういうことやの、話だけでも聞いてもらえまっしゃろか？」

侍C…「ちっ。農民に雇われてたまるか！このがきめ！」

まさちゃん…「…すいまへん。」

森島様…「なやろか来まへんなあ。まさちゃんでは役不足か。

道覚様どの、ちーとばかり行って侍を連れてきてくれんか。

猫の怨霊にたたられておるから、

高名な念仏僧が除霊してさしあげると言えば、

来てくれるよ。」

道覚様…「人をだまんねんようなことはせぬ。それに侍を試すのは、ウチは反対や。

もし、強かったとしても、試したとあつては、気を悪くする。

弱かったら、井之川様の權にぶったたかれて死んでしま  
うわ。」

恵向様…「あむあみだぶ、南無阿弥陀仏」

つきー…「オラは怖いよー 侍に斬られるよー」

そうべい…「そう、おびえるでない。つきー。それに宿屋の主人  
が出かけとる間だけや。

宿屋の主人は、もうすぐ帰ってくる。」

そのとき、高速で宿屋の入り口に向かってくる者があった。  
井之川様は、手に力を込めた。一気に緊張が走る。」

飛脚…「む。　ご冗談を。」

宿屋に向ってきた飛脚は、入り口の手前でピタリと止まった。

井之川様…「…!!!!!!」

森島様…「お見事。さあ、中へ。」

宿屋の広間で話し込む一同。

森島様…「試すようなことをして、すまなかった。こういうわけや  
ったのや。」

飛脚…「侍を用心棒として雇うちうことやろか。それは大変やね。」

森島様、これが積藁の国屋書店から依頼された本や。受け  
取りの確認を。」

森島様…「いや、そのまえに。野伏退治の件、協力してくれんか。  
」

飛脚…「いえ、ウチは侍ではおまへんやし、戦場の経験もおまへん。

雇っていただいても、。」

森島様…「せやけどダンさん、試験に合格したではおまへんか。たいした腕前や。」

飛脚…「お客様の荷物を安全に届けるのも、ウチの役目やろから。

賊に襲われたり、エライんや。危険を察知するこ  
とができて、

一流の飛脚と言えるんや。今のご時勢やろ。」

森島様…「その能力欲しい。働かんか？」

飛脚…「申し訳おまへん。飛脚の仕事があるさかいに。」

森島様…「じゃあ。その本。受け取りまへん。」

飛脚…「は？」

森島様…「野伏退治を引き受けてくれへんと、注文した本受け取りまへん。

それで、積藁の国屋書店に届やろかったよ！って言い  
にいく。」

飛脚…「それは困るんや。どうか受け取っておくんなはれ。」

森島様…「だゝめ。」

飛脚…「うう…。荷物はここに置いておきよるさかいに。…」

森島様…「お主はそれでも、飛脚か！！」

るべきやろー!!

それを生業としとるなら、命に代えても届け  
るために、危険を察知するほど、用心を払って仕事を  
しとるんやないのか?!

飛脚…「そないな言われても…」

森島様…「受け取りの花押なしで、積藁の国屋書店に報告しても納  
得せんやろうわ。

ウチが届やろかいと文句を言えば、わかるよね。評判  
落ちるよ。

そうしたら、仕事の依頼、来るのやろか?」

飛脚…。(´A` 111)

森島様…「ほれほれ。」

飛脚…「その仕事引き受けまんねん。後生やろから、本の受け取り  
を。」

なおよし…「森島様が鬼に見えてきた。」

つつきー…「うむ、同感や。」

森島様…「名はなんと申す?」

飛脚…「鹿沼通泰。飛脚仲間からは、疾風のみちひろと言われとる。  
」

こうして、7人の仲間が集まり、村を守ることになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7173y/>

---

一人のサムライ@関西

2011年11月21日12時29分発行